

“NIDS NEWS”



防衛研究所企画室編集(03-3713-5912)

..... 2011年5月の主な出来事

《 ナイジェリア国防大学研修団の来訪 》



5月11日、ダーリントン・エブヌ・アブドゥラヒ空軍准将以下21名の国防大学研修員が防研を訪れました。同研修団の来訪は2007年5月以来、2回目です。一行は所長表敬の後、防研研究者と意見交換を行いました。意見交換では防衛研究所の研

究・教育や震災後の日本について議論が交わされました。

《 第58期一般課程 》

5月は事例研究 及び講座「日本の防衛」が実施されました。講座「日本の防衛」については、各政党による安全保障政策に関する講義を先月より継続して実施するとともに、18日にムハマド・ルツフィ駐日インドネシア特命全権大使による特別講義が実施されました。また、東日本大震災の教訓に関して、31日には在日米軍司令官バートン・M・フィールド中將による特別講義の他、陸上自衛隊については、陸上幕僚監部防衛部から松坂1等陸佐が、海上自衛隊については、海上自衛隊幹部学校から將司1等海佐が特別講義を実施しました。

また、5月22日から28日までの間、訪問国の政治、軍事、経済、社会、歴史及び文化に関する幅広い研修を通じて国際感覚を養うとともに、日本の安全保障を考える上での知見を得ることを目的に、3つの研修団に分かれてオーストラリア、中国、インドネシア・マレーシアを訪問する国外現地研修を実施しました。



栞田所長を団長とするオーストラリア研修団19名は、5月23日にキャンベラ入りし、アジア太平洋民軍センター、戦略政策研究所での研修を皮切りに、以後、国防大学、国会議事堂、国防省、統合作戦司令部を研修し、シドニー移動後も陸軍・海軍・空軍司令部等、非常に充実した研修を行い、オーストラリアの安全保障や外交、軍事情勢、さらには国民性などについて理解を深めることができました。

また、戦争記念館、クタバル記念碑及び帝国海軍特殊潜航艇を訪問し、先の大戦における戦没者を偲び献花を行いました。さらに、佐藤重和駐オーストラリア日本国特命全権大使主催レセプションの招待を受けるとともに、オーストラリア国防大学防衛戦略研究センター長主催のレセプションにも参加し、オーストラリア研究者等と意見交換を行うなど極めて有意義な時間を過ごすことができました。



金子統括研究官を団長とする中国研修団16名は、5月22日に北京入りし、国防大学及び現代国際関係研究院において、教官、研究者等と東アジア情勢等に関する意見交換を実施しました。また、北京軍区所在の空軍第24師団及び陸軍第196旅団にて研修を行い、部隊の概要について理解を深めることができました。

25日からは大連に移動し、大連艦艇学院では、院長等との懇談や学生との意見交換を実施するとともに、企業研修として路明集団を訪問しました。

本研修を通じて中国の安全保障、軍事情勢、産業、国民性等について理解を深めることがで

き、非常に有意義な研修となりました。



石井教育部長を団長とするインドネシア・マレーシア研修団18名は、5月22日マレーシア入りし、23日P K Oセンターを研修し、マレーシアのP K O訓練センターの現状に関してブリーフィングを受けた後、質疑応答を行いました。本センター訪問は、日本において設立されたP K Oセンターの今後の運用

を考えていく上で大変有意義な研修となりました。24日は海事研究所を研修した後、インドネシアへ移動しました。

インドネシアでは、25日に国立英雄墓地で日本人埋葬者数名の墓に献花した後、国防大学を訪問し、研修員代表による「平成23年度以降に係る防衛計画の大綱」の概要説明を行い、双方の質疑応答を実施しました。翌日、国防研究所を研修した後、デンパサールにて史跡研修等を行い、28日帰国しました。各訪問先における実地研修、各国における効果的な意見交換等により、訪問国の状況を直接体験するとともに、安全保障に関する見識を深めることができました。

《 武貞元統括研究官の延世大学への赴任 》



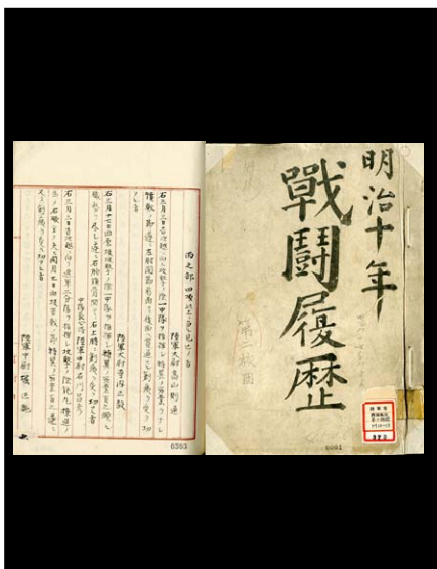
2月に防衛研究所を退官した武貞秀士元統括研究官は、6月1日より、韓国インチョン市にある延世大学国際学部にて専任教授として赴任することとなりました。9月から国際学部の唯一の日本人教授として、今春オープンした新一年生のための国際キャンパスにおいて、韓国人学生、中国、米国、日本からの留学生を対象に「日本と朝鮮半島」について講義する予定です。今回の就任により日韓の相互理解の促進、国際交流の発展に寄与するものと期待されます。

・・・「史料紹介コーナー」・・・

平成23年度は、歴代陸海軍大臣の中から毎号一人を取り上げて、図書館史料室が所蔵するその人物の関連史料を紹介しています。

《 ^{てらうち}寺内 ^{まさかた}正毅 1852～1919年 《

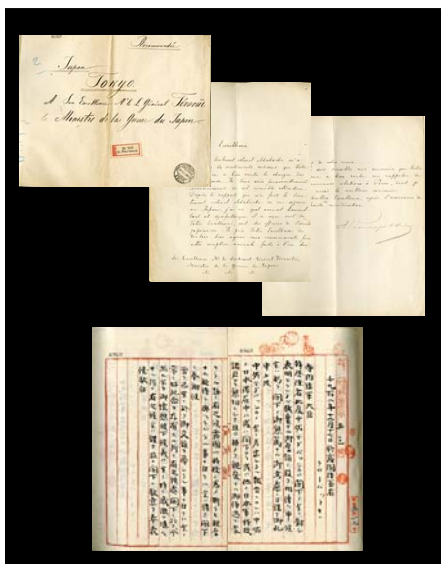
- 西南戦争で負傷し、陸軍大臣として日露戦争の勝利に貢献した将軍 -



丙之部四項以上二当ル見込ノ者

(登録番号：陸軍省 - 西南戦役第2旅団 - M10 - 13 - 373)

寺内正毅元帥は、明治3年12月、陸軍軍曹に任ぜられた後、翌4年8月少尉に任官、その後、教育總監、陸軍大臣、朝鮮總督等の要職を歴任しました。この史料は明治10年3月、近衛歩兵第1連隊第1大隊第1中隊長の同元帥(当時大尉)が、西南戦争において負傷した時の戦闘履歴です。「右三月十七日田原坂攻撃ノ際一中隊ヲ指揮シ特異ノ所業有之頗ル職務ヲ尽シ遂ニ右胸鎖骨間ヨリ右上膊ニ創痕ヲ受ケ功アル者」とあります。同元帥はこの時の負傷によって右手の自由を失い、拳手の敬礼も左手で行わなければならない状態となりましたが、引き続き現役に留まり活躍しました。



露国陸軍大臣 寺内大臣へ挨拶状の件

(登録番号：陸軍省 - 密大日記 - M36 - 1 - 3)

寺内元帥は明治35年3月、陸軍大臣に就任しました。この史料はロシア陸軍大臣クロパトキン大将から同元帥(当時大将)宛てに届いた1902(明治35)年12月17日付の書簡です。訪日したロシア軍将校の接遇について「報告ニヨレハ・・・閣下ヨリ或八他ノ日本軍将校諸君ヨリ懇切ニシテ且ツ極メテ信愛ナル御待遇ヲ蒙リタル趣ニ有之候・・・余ハ謹テ閣下ニ奉謝候」(日本側翻訳文)と感謝が述べられています。クロパトキン大将とは同元帥がフランス公使館附武官として勤務していた頃からの知己でした。しかし、この書簡が書かれた約1年後には互いに日露戦争を戦うこととなりました。

《お知らせ》

史料保存のためのマイクロ撮影にともない一時的に閲覧できない史料があります。

詳しくは、防研ウェブサイト「お知らせ」をご覧ください。

記事に関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。なお、記事の無断引用はお断りします。
 防衛研究所企画室
 専用線：8-67-6522、6588 外線：03-3713-5912
 FAX：03-3713-6149 E-mail：nidsnews@nids.go.jp
 防衛研究所ウェブサイト：http://www.nids.go.jp